

洛星新闻

卒業
記念号

今月七日第二十二回洛星高校卒業式が行われた。在校六年間数々の思い出を残し、本校を巣立ってゆく彼等は、一人一人新たな目標に向って闘志を燃やしていることだろう。新聞局では、校長先生、高Ⅲ担任の先生に投稿していただいたはなむけの言葉を掲載し、卒業を祝おうと思う。

可能性を信じて

校長 村田源次



人間には自分で意識せずに成長する乳幼児、少年期があります。この時期には、人はいわば生物的に、時の流れに従って成長していきます。しかし同時に、人間は精神的乳児期から自己確立と、成年期へと発達がおこなわれます。この時期には、色々の苦しみ、悲しみを体験し、これを乗り越えて主体的な人格が確立されてくるのです。この乗り越えようとする努力が、若人の生きがいのひとつとも言えるのです。

二十七年の間に、洛星の環境にはさまざまの変化がありました。しかし、一貫して教えて来たことは、人間の生命の尊厳、自由、平等です。權利と義務についても教えました。学校である以上、何処でもこれについて教えています。しかし、本学園では、この教える基礎を神に求めていることを忘れてはなりません。それは、神に求めて始めて、人間にある權利はすべて与えられた權利として理解できるのです。そして自分に与えられた英知を人間共同体の発展のために生かすことを学ぶことによって、そうする努力に生き甲斐を感じるのです。

諸君は成長過程において、さまざま



▼提供写真部

担任から……



A組担任
苦名 康



B組担任
富岡 鉄平



C組担任
三浦 弘勝



D組担任
田中 成彦

北山杉に想う

高3B担任 富岡鉄平

私がまだ君と同じ年代の頃、京都二中（五年制の旧制中学）では、初代の校長中山先生の発案で毎年全校生徒が参加して京都の北山に植林を行なう行事があった。まっすぐ立つていられないような山の斜面に、杉の苗木を一本ずつ植えた。当時は植林の意義なんかより、「弁当はまたかな」などと、たわいもないことばかり考えていたものだったが、そのとき一メートルの杉の苗木が、今は四十年の風雪にみがかれて立派な北山の杉の木立になっているのを見ると「ああ、良かったな」と、当時の先生の自然や人間に対する感服の意を改めて知り、懐しい気持ちを抑えられない。そして、あまり上手に植えてもないのに、見事に育つ植物の生命にいとまじさを感じる。

ドイツや北欧では、木に人格を認める風習があり、木を大切にしようとくみ育て、街にも平野にもすくすく育つ。

もっと語り合いたかった

H3A担任苦名康

もつと君たちと語り合いたかった
運剣や
欠席や
服装のことだけでなく
人生について
未来について
生きがいについて
もつと君たちと
肩を組んで語り合いたかった

あの時
たしかに僕の感じた断絶
だがしかしあれは
実に充実した断絶ではなかったか
あの夜のように
もつと君たちと語り合いたかった

卒業式を迎えて

高3C担任 三浦弘 滕

わたしたちの生涯のうち、主な関門を通過する際に行われるものに「通過儀礼」というのがあります。縄文時代の「抜鰯」の例を挙げるまでもなく、出生後の「御七夜」、「七五三」の祝い、「成人式」、「還暦」の祝いなど、よく知られています。また、入学式、卒業式も新しい通過儀礼の例として大切にされています。

通過儀礼は、その行われる時期、年令等によつて、その意味合いも多様です。いま、卒業式を例にとるならば、それは、成長の一段階に達したことを祝う意味もありますし、と同時に門出を祝つと意味もあります。また、門出に際しては、諸君の願う目的、あるいは危険を

周囲の人々が力を合わせて乗り切らせようという願いも込められています。これ以外にも、卒業生、諸君や諸君に関わつた周囲の人々には更に、様々な意味があると語ります。わたしも諸君に関わつたひとりとしてこんなことを願っています。卒業式を単なる社会の慣行や、学校とのお別れの儀式として済ましてしまふのではなく、自分の人生の節目のひとつとして、真摯に且つ謙虚に自分を振り返る場として大事にして欲しいということです。と同時に、受験という重圧のなかで、ともしれば失いがちであつたと思うのですが、周囲の人々との関わりにも目を向け、気持ちを持ってくれたらと思います。

卒業生の諸君へ

高3D担任 田中成彦

二十二期生の諸君、心から御祝の言葉を贈ります。おめでとう。この稿を書いておりますのは、本業試験までまだ始まってない一月たいてい思いますが、
な指揮ぶりや、体育祭でのJチン（いやM君だったかな）の重厚な力走ぶりは、永く記憶しておきたいと思ひます。
この本業式で吾達を送り出すわけ

☆表彰☆

彰
☆

六ヶ年皆勤	十二名
〃 精勤	十六名
三ヶ年皆勤	十名
〃 精勤	十四名

笠 衣

ありがたいたいという
今は感謝の意味がふつ
うの意味だが、よく考
えてみると少し意味が
おかしい。古代では

感謝の意味でなく、めったにない貴重なものという意味である。今昔を比べてみると、随分違っている。結局時間のへだたりが、物ごとをこう変えてしまふのである。▼速さも変わる。現在、乗り物は速いし、時間のたつのも早い。実際に少し前なら十年一昔などといってせかせる世の中ではなかった。それがなき現在は五年一昔と言ったり、あるいは三年一昔など、ちっとも時間の長さは変化せずいつも同じなのに感覚のみ早くなっ



